

《2008年1月例会報告》

【日時】2008年1月23日(火)19:00~21:00(その後「ルン」~0:00頃)

【会場】筑波大学附属高校3F音楽室(東京都文京区大塚1-9-1)

【テーマ】高校サッカーと民放テレビ-首都圏開催問題を中心に

【ゲスト】坂田信久(国士舘大学大学院教授/元日本テレビスポーツ局長)

【進行】牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会/元読売新聞運動部)

【参加者(会員)13名】阿部博一(R&A) 井上俊也(NTTコムウェア) 牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会) 宇都宮徹彦(ライター) 北原由(都立武蔵野北高校) 嶋崎雅規(帝京高校) 鈴木崇正(NECメディアプロダクツ) 高橋誠(東京都サッカー協会フットサル運営部) 徳田仁(株セリエ) 中塚義実(筑波大学附属高校) 野田直広(富士電機) 松本秀一(都立江戸川高校サッカー部監督) 両角晶仁(toto)

【参加者(未会員)18名】秋江昌司(スポーツマネジメント(株)) 伊藤敦(中央大学5年生) 伊東敬郎(本郷高校サッカー部トレーナー) 内田裕之(自由学園) 浦野浩一(都立北園高校) 金子隆之((財)日本サッカー協会ナショナルトレセンコーチ) 川島健司(読売新聞運動部) 国島栄市(ビバ!サッカー研究会) 近藤詩月(ビバ!サッカー研究会) 済木崇(ビバ!サッカー研究会) 坂田信久(国士舘大学大学院教授) 佐藤真成(日本サッカー史研究会) 塩見要次郎(読売新聞サッカー推進事務局) 田中成男(日本サッカー史研究会) 武藤太智(A.C.ammaliatore) 百田崇人(専修大学) 山野辺裕(日本サッカー史研究会&ビバ!サッカー研究会) 渡邊雄司(筑波大学大学院)

注) は初回参加のため参加費無料

【ルンからの参加者及び報告書作成者】室田真人(中央大学大学院)

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書はあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

高校サッカーと民放テレビ

~ 首都圏開催問題を中心に ~

ゲスト講師：坂田信久 進行：牛木素吉郎

ゲスト講師

坂田信久氏の略歴 国士舘大学教授、元日本テレビスポーツ局長、プロデューサー、ディレクター、前東京ヴェルディ1969社長

コーディネーター

牛木素吉郎氏の略歴 ビバ!サッカー研究会代表、サッカーライター、前兵庫大学教授、元読売新聞社運動部次長・米国駐在編集委員

はじめに（中塚）

今回は、サロンの会員はもちろんですが、せっかくの機会ですので、牛木さん経由でビバ！サッカー研究会、日本サッカー史研究会、あるいは我々の方から高体連関係の方にも案内を送り、サロンの会員以外の方にもたくさんお越しいただきました。ここに来た以上は、肩書きを抜きにして良いディスカッションをしていきたいと思うのですが、どんな人がいるかという情報も共有したいと思いますので、参加者名簿への記入をよろしくお願いします。

いつもは自己紹介をここでしてもらおうところですが、参加者が多いので、紹介は配付資料でかえさせていただきます。この人と話したいなというときには、この後ルンで延長戦をやりますので、そこでまた密度の濃いコミュニケーションをとっていただければと思います。あと、せっかくですので発言をされる前に、自分の名前と所属をいっていただければと思います。

それでは牛木さん、よろしくお願いします。

本日の流れ（牛木）

牛木でございます。このサロンのメンバーになりまして、3年くらい。割と熱心に出ています。自分でもビバ！サッカー研究会というグループを組織してまして、これも月例会を月に一度やっています。それから、これはサッカー協会内の施設を利用させていただいているのですが、日本サッカー史の研究会を、誰でも参加できる会として月に1度やっています。今月は昨日やったばかりです。きょうは高校サッカーの話をするということで、長い間私といっしょにサッカーに関する仕事をしてきた坂田さんに来ていただきました。せっかくの機会だから、これは多くの人に聞いてもらいたいと、私の方のグループにも案内をさせていただいて、今日初めて来られた方もいます。

プリントを用意しています。2種類あって、裏表になっているのが私のつくったものです。その表にあります時間表に沿って進めていきたいと思います。坂田さんはテレビの出身ですから、時間厳守には慣れているはずですが。かつて小林与三次さんというかたが日本テレビの社長で、非常に高校サッカーにも力を入れてくださった。読売クラブ、今のヴェルディの方にも力を入れていただきました。その人が話の長いので有名だった。それを、日本テレビの社長になったあと坂田さんたちが訓練したそうです。その後、読売の社長になって来られたのですが、そのときに坂田さんが「小林さんは大丈夫だから。もう訓練して、20秒と言えば20秒でしゃべれるようになったから」と言ったんです。「そうか、やっぱりテレビは厳しいな」と思っていたんですが…。小林さんも読売の社長になってからは最初の3日くらいですね。4日目くらいからは元に戻っちゃって、また延々と演説をするというふうになりました。私たちはそんなことは許されませんから、時間厳守でやりたいと思います。

最初にぼくが「高校サッカーの歴史的背景」の話をして、その後、坂田さんに主として「高校選手権と民放テレビ」というテーマで、民放が参入、引き受けた後の話。そのなかで、関西から首都圏に移転してきたときの話をしてもらおうと思います。

それから、私の話の終わりごろ、坂田さんの話の終わりごろに、それぞれ事実関係について、例えば、それは昭和29年と言ったけど昭和30年ではないかというような、そういう事実関係の指摘を受け、訂正してから次の話に入る。そして、いちばん最後にフロアのみなさんの質問や意見をお聞きしたいと思っています。

・高校サッカーの歴史的背景について（牛木素吉郎）

私の話を15分から20分くらいしたいと思います。これは、大まかに2つに分けたい。1つは戦前の話ですね。戦前の高等学校は上級学校で、高等教育の入り口でした。中等教育は中学校が担っていて、中等学校と言われていました。旧制の中等学校は、だいたい、今の中学校1年から高校2年くら

いの年齢です。旧制中学は5年間あって、この5年間の中学校の大会というのが戦前にありました。その話を1つしたい。

それから戦後ですね。戦後は高体連ができて、非常にいろんな変化がありました。そういう話を、私の後半にしたいと思います。

1. 戦前の中等学校大会

1) はじまり(協会設立以前。高等師範などの普及への熱意とマスコミが組む)

まず、戦前の中等学校大会について話したいと思います。これも2つのことを中心に申し上げたい。1つは、今やっている高校選手権大会の元は、兵庫と大阪で大阪毎日新聞がやっていた大会で、それを引きついで今の高校大会になっているわけですが、実は戦前それが唯一正統の中等学校大会というわけではない。中等学校大会は幾つもあったということがまず1つなんです。

そして、時期も場所もいろいろある。夏にやっていたこともあるし、正月、1月、2月にやっていたこともある。だから、「大阪で伝統があって正月にやっていたものを首都圏に持ってきたはげしからん！」という議論は、戦前のことを考えれば成り立たない話なんです。しかもそれには面白い話があって、まずその話をしたいと思います。

戦前の中等学校の大会はいつごろ始まったかということ、1918年、大正7年から始まっています。この年に、ぼくが知っているだけで3つの大きな大会が同じ年に始まりました。1つは関東で、場所はこらへん(筑波大附属高校付近)で始まりました。関東蹴球大会という名前です。これは東京師範関係者が中心となって、東京高師が主催で、朝日新聞が協力して、東京高師系と東京朝日新聞の手でつくられました。

もう1つは愛知ですね。名古屋に新愛知という新聞がありまして、これは今の中日新聞です。戦争中に新愛知と名古屋新聞が軍部の手で強制的に統合させられて、中部日本新聞となり、今の中日新聞となるわけです。その新愛知が主催して、名古屋に旧制の上級学校で第八高等学校というのがあったのですが、この八高が中心となって、明倫中、愛知師範など、4校参加して始まった。これは第1回のはきは、東海蹴球大会という名前でした。

そしてもう1つ。大阪毎日新聞主催で、日本フットボール大会がはじまりました。実はその前年、半年くらい前に、近畿蹴球大会という名前の大会が行われました。これは4校参加している。それを引き継いだ形で日本フットボール大会を、大阪毎日新聞主催が始めました。ア式というのはサッカーで、ラ式というのはラグビーなんですけど、ア式とラ式の両方をやったんです。ア式の方は8校で、ラ式の方は3校参加です。

では、なぜ3地域で別々の新聞社が絡んで、同時に始まったのでしょうか。それは私の推測なんですけど、その前年にあった極東選手権大会に日本のサッカーが初めて参加した。これが刺激になったのだと思います。これは日本の芝浦で行われたんですけど、ほとんど東京高師の単独チームでした。1人だけ野津さんという、日本サッカー協会会長になった人が東大から加わっているのですが、ほぼ高等高師で出ている。でも、それによって、多くのサッカー関係者がサッカーってこういう大会をやるものだとなつたんですね。その前に野球は、今の甲子園ですね、全国中等学校野球大会が始まっていますから、サッカーもやるべきだとなつたんだと思います。人間はみんな同じことを考えますので、東京でも名古屋でも大阪でも同じことを考えたのだと思います。

そうして、大会が始まったわけなんですけど、同時に「主導権争いも始まる」。これがぼくの憶測なんですけど、3つの大会が続いていて、主として東京だったら関東地域、大阪だったら関西地域が中心となってやっているんですけど、他のも参加している。例えば、東京の師範学校が関西の大会に参加していることがある。でも、予選があるわけではなくて、全国規模というわけではない。それでも名前の方は、実は東海地方の新愛知のやつは、すぐに全国蹴球大会という名前にしました。実際には

主として名古屋近辺しか集まっていないのですが、全国蹴球大会とした。毎日新聞の大阪大会は、前年の近畿の大会のときは近畿大会だったのに、もう第1回のときには日本フットボール大会と、日本という名前が付いているんですね。東京は日本をつけていませんが、それは付けられない事情があったようです。主催の東京蹴球団の英語名は、Japan Football Club だったんです。正しい英語では、Japanese Football Club と呼ぶのかもしれませんが。これとは別に東京フットボールクラブというイギリス人のチームが東京にあって、それを英語に直すと Tokyo Football Club である。英語に直すと、Tokyo Football Club になってしまう。同じのが2つあるとまずいからといって、Japan Football Club と称しました。英語では主催者が「日本」を名乗っているわけです。

このことの背後事情をぼくが憶測しているわけです。3つの大会を始めた、それぞれの地域とそれぞれの新聞社が、これを全国のものにしようという気持ちがあって、それが名前に表れた。この主導権争いだったと思うんですね。そして各地域でやっていて、どこも止めなくて続いていく。全国大会をやるとうするのを統制する団体は、その後、日本蹴球協会になるわけですが、その日本蹴球協会をつくるための主導権争いでもあったと思うわけです。

2) 中等学校大会の統合

他にもいろいろ話はあるんですけど、簡単に言うと、戦前の中等学校大会は、他にもあったかもしれませんが、ぼくの知っている限りでは3つあって、3つの地域と3つの新聞社の主導権争いになっていた。

それはいつまで続いたかということ、昭和7年になって統一しようということになる。軍の力が強くなり、それに伴って体育協会の力も強くなった。軍の下請けみたいなものになってきたときに、3地域が勝手にやっているのはあれだろうから、全国大会として1つでやろうということになります。非常に統合に苦労するんだけど、昭和9年に大阪でやっていた毎日新聞の大会だけ残し、あとは止めてくれということになった。だから、毎日新聞の大会の歴史は、戦前は全国大会として行われたのはたいして長くないんですね。なぜ大阪が選ばれたかということ、大阪の方が熱心だったというのが1つあると思う。それからもう1つは、割と早い時期から、昭和3年くらいからだと思いますが、予選をやっているんです。予選をやって、実際には来なくても、全国から参加できる形になった。それで戦前の大会がようやく統一されたわけです。そういうわけだから、今の高校選手権の前身だった大阪の大会が、戦前からが正統だということはない。場所も3カ所あったし、時期もいろいろあったということ。これを、坂田さんの話の前提として知っておいてもらいたいと思います。

3) 関西の大会(大毎の大会)

詳しくは年表みたいな形で書いてあります。(補足資料1 参照)

関西の大会、大阪毎日の大会は、正式なものとして認められるまでに、どのような経緯があったのかを書いてあります。そして、1934年、昭和9年に、全国大会として認められました。東京蹴球団の、関東蹴球大会などは、非常に残念がって、なかなか言うことを聞いてくれなかったらしいです。

2. 戦後の高校選手権大会

戦後になると、まず中等学校大会が復活した。もちろん大阪で復活したわけですね。そして、全国大会の参加チーム数は、16校から始まりました。それが、じょじょに増えていって、昭和41年には32校になる。32校というのは、トーナメントをやるにはきりがいいですね。ただ、全国大会ということになると、出られない県がどうしても出てきてしまう。そこで、地域予選をして地域代表で出てきます。それで割と成功していた。

私は新聞記者になりまして、新聞記者の1年生のときから、1957年1月の大会から、正月はたいてい大阪で過ごしておりました。大阪の新阪急ホテルというところに泊まって、西宮に通うというよ

うなことをやっていました。

ところが、高校選手権はうまくいっていたんですけど、1 つ問題がありました。それは、大阪毎日
は、一番最初はサッカーとラグビーと一緒に始めたわけですね、日本フットボール大会で。それが分
離して、大阪毎日のサッカー高校選手権と、大阪毎日のラグビー高校選手権になった。ぼくが取材を
始めたころは、主としてサッカーは西宮球技場で、ラグビーは花園でやっておりました。当時から、
高等学校でサッカーをやっている人の数とラグビーをやっている人の数を比べると、サッカーの方が
多いんです。でも、人気はラグビーでした。毎日新聞の扱いもラグビーの方が大きいし、お客さんも
入っている。というようなことで、関西でサッカーとラグビーをやっていて、競技人口ではサッカー
の方が多いんだけど、人気はラグビーの方がある。サッカーがなかなか盛り上がらなかった。そうい
うことも頭に置いておいてください。

3 . 高校総体創設にともなう問題

1) 全国高等学校体育連盟 (高体連) と高校総合体育大会の創設

それから大きな問題が起きた。それは、高校体育連盟というのが戦後できました。これは特待生に
関することで問題となった野球の高校野球連盟とは性質が違います。高野連は民間の人たちが入っ
ている団体ですが、高体連は、学校の先生方、組織としては校長先生の集まりです。高野連の方はとも
かく、高体連の方は、教員の集まりですから、文部省の方針に従わざるを得ない立場にあった。高体
連は野球以外のいろんなスポーツを持っているわけですが、その高体連がそれまで個別に行われてい
た水泳や陸上などの高校選手権をみんな集めて、高校総合体育大会というものにして、そして盛大な
開会式をやるとういうことを考え、始めたんです。これを初めて考えた人は、ぼくが本人から聞いた
自慢話では、広堅太郎というホッケー協会の人で、NHK の運動部長です。その人が、オリンピック
のような、国体のような盛大な開会式を、高校生を集めて、1 万人の大開会式をやって、それをテレ
ビに映したい、と考えたのだそうです。それで、夏にやっていたスポーツの高校選手権は1ヶ所に集
められました。ところが冬にやっている、例えばスキーやスケート、サッカーやラグビーは冬に残っ
ているわけですね。スキーやスケートを夏に持っていこうということ、さすがのNHKも言えな
かった。だけど、サッカーとラグビーには夏に移ってくれと言いました。

2) それぞれの対応 (サッカーとラグビー & サッカー協会と毎日新聞)

サッカーとラグビーはそれぞれ悩んだわけです。サッカー協会は、もし夏に移るんだったら移して
もよい。しかし、冬は続けてやると主張しました。それで高体連のサッカー部の、つまり今の中塚
先生のような立場にいる人たちが集まって会議をやりました。松浦利夫先生というかたが長で、松浦
先生がみんなの意見を聞いたところ、多くの地方から来ている先生は、夏に移行することに賛成しま
す。理由は2つありました。1つは、多くの学校は大学受験がありますから、夏休みが終わったら受
験勉強をさせたいというのがあった。これは日本の学校制度から言えばもっともな意見だと思います。
もう1つは、ある県、例えば兵庫県にいて、夏になるとサッカーとラグビー以外のスポーツの選手は
盛大に見送りを受け、県の応援を受けて全国大会に行くわけです。ところが、サッカーとラグビーは
それが無い。冬までずっと練習をして、ということになります。それと、スポーツ全体の組織の中で、
高校サッカーとラグビーが取り残されるというような危機感を、地方のサッカー部の先生は持って
おられたということがあって、夏に移すことに賛成をしたのです。それで、サッカー協会の方は、夏に
移すのはいいけど、正月の大会も残すと主張しました。これは小野卓爾さんという人が理事で、その
人が主張したんです。

当時、文部省の次官通達というのがあって、高等学校の全国大会参加は年に1つに制限していま
した。ただし、国民体育大会に高校の選手が出るのはよいことになっていました。野球は、夏の甲子園
と春の選抜と両方やっているんですが、高野連は高体連の組織ではない。これは民間人が役員になっ

ての組織なので、必ずしも文部省の方針通りには動かない。だけど、高校の先生方で組織されている高体連は文部省の方針に従わざるを得ない。サッカーはその一部ですから、全国大会を2つ主催するわけにはいかないのです。それで、高体連は、サッカーは夏に移すことになったから、冬は止めろと言ったわけです。サッカー協会は、それでは独自でやると言って、高体連の方針を無視して冬の大会を続けました。32校の参加だったのを16校に減らしてやったんです。

たぶん小野さんは、冬にやるのを毎日新聞が応援してくれると信じていたと思います。ところが毎日新聞は手を引いてしまったんです。NHKの方は、夏に毎日と共催でもいいと言っていたんですが、毎日はいっさい手を引くことになりました。その年は青森で高校総体があって、十和田でサッカーをやることになったんですが、そのときにプログラムに後援NHKと毎日新聞と入って刷ってありました。しかし、毎日新聞が消してくれと言って、急遽その上に紙を貼ったということがありました。

4. 日本蹴球協会による単独開催（苦難の5年間。～1971年）

毎日新聞、高体連が主催からおりてしまい、サッカー協会は財政的にも苦しい思いをして、独自で冬の大会を開催します。高体連は協力できませんから、高校の先生方は、勤務を離れて、高校の組織も離れて、個人として協力してくれました。だけど、全部の先生が協力できたわけではない。校長先生がダメだと言えばダメですから。そういうふうな苦しい状況でやっていました。テレビも、まったく放送してくれない。NHKが決勝だけ放送していたくらいです。

そういうときに、サッカー協会に日本テレビの坂田さんが現れて、「冬の大会を日本テレビでやろう！」と言ったのです。そのへんの事情は坂田さんに後ほどどうかがいたいと思います。

これまでのところで何か事実関係のようなところで、質問はありますか。

質疑応答

鈴木：先ほどの推測だとおっしゃった戦前の新聞社の話なんですけど、地方紙とかブロック紙なんですよ。当時の新聞社は、全国の販売網というのはなかったんですか。

牛木：朝日新聞と毎日新聞だけ、全国と言っても東京と大阪だけなんですけど、系列がありました。朝日新聞は、東京は東京朝日新聞、大阪は大阪朝日新聞。毎日新聞は、大阪は大阪毎日新聞、東京は東京日日新聞というものです。例えば、いまの甲子園を始めたのは大阪朝日です。これは京都大学の野球部のOBが、野球の中等学校大会をやろうということを思いついて、お金がないから大阪朝日に頼みに行ったらはじまったのです。それで、大阪朝日から始まったんです。毎日の大会も、大阪毎日から始まっています。それで大阪でやっているけど、東京でやらないということもあります。明治の終わりごろに東京朝日が「野球害毒論」という連載をやって大もめにもめた。野球というのは盗塁があったり、サインを盗んだり、あんな泥棒みたいなスポーツは良くないっていう議論です。教育に良くないと言っていたのに、大阪の方では今の甲子園の計画が始まっているんです。今でも対抗意識はあります。読売新聞は、東京読売と大阪読売は別会社です。

牛木：他に何かありますか。

中塚：確認と補足ですが、戦前の東京、東海、関西の3ヶ所で蹴球大会が行われたと。その東京の主催団体ですが、資料には東京蹴球団と書いてありますよね。それを牛木さんは、ところどころ関東蹴球団と言われていたんで…。東京蹴球団ですよ。

牛木：東京蹴球団です。大会名が関東蹴球大会です。

中塚：「東京蹴球団」は今も東京都社会人リーグでやっています。いわゆる「東蹴」です。

牛木：東京蹴球団は、東京高師とその卒業生が中心になって作られたクラブです。

中塚：ここは東京高師の附属なので、関東蹴球大会にずっと出ていました。日本フットボール大会が予選をやるようになったのが大正15年で、その大会から附属も関西の大会を目指すようになりま

した。ちなみに、大正 15 年から朝鮮半島代表が出場し、次の大会で平壤のチームが優勝しています。

牛木：これはプリントの表の方ですね。下から 5 行目くらいのところに書いてあります。東京蹴球団主催で、関東蹴球大会があったんです。

牛木：他にございますか。一般的な質問は最後に受け付けたいと思います。なかったら、坂田さんの方にバトンを渡したいと思います。じゃあお願いします。

．高校選手権と民放テレビ（坂田信久）

坂田です。よろしくお願いします。今日のテーマをいただきまして、思い起こしてしましたら、いろんなことが浮かんで来て...。どんどん思い出していくと、本当に一日中でも話しきれない量があります。取りとめのない話になってしまったら申し訳ありませんけど、とりあえず話をさせていただきます。

1．1970 年前後のサッカー界の状況と読売サッカークラブの誕生

高校サッカーのテレビ事業は、1970 年度の大会、1971 年 1 月の全国大会から始まります。そのころのサッカーの状況がどんなだったのかという話を、まずしたいと思います。

先ほどの牛木さんの話の最後にありました、全国高校サッカーから毎日新聞が手を引いたのは 1966 年の大会でした。1965 年には、クラマーさんの提案によって、日本サッカーリーグ、JSL が 8 つの実業団チームでスタートしました。JSL がスタートしたということで、日本のサッカーが注目され始めていました。そういう中で、1968 年 10 月のメキシコオリンピックで、日本代表が銅メダルを取ったことで、国内ではサッカーの人気が出てきました。1970 年 4 月から 1 年間、日本テレビでは、梶原一騎の週刊少年キングの劇画「赤き血のイレブン」をアニメーションとして放送して、大変高い視聴率を取りました。ご存じだと思いますが、浦和レッズの赤は、この「赤き血のイレブン」の赤なんです。

メキシコオリンピックで銅メダルを取ったということで、日本サッカー協会の野津謙会長が、読売新聞社の正力松太郎社主を訪れて、「日本のサッカーは、今度はワールドカップを目指したい。そのためには、プロにならなければならない」と。プロ野球チームを持っている読売グループで、サッカーのプロクラブの先鞭をつけてくれないかというお願いに来られたわけです。もちろん、牛木さんとか、もう亡くなられましたけど私の日本テレビの先輩の笹波昭平さん(読売サッカークラブ初代事務局長)とか、ぼくもそうでしたがサッカーを盛んにしたいという人たちのいろんな思いが入ったのことはありました。

このように時系列で並べてみますと、1969 年 1 月 3 日の読売新聞朝刊の一面に、「日本サッカー発展のために、読売サッカークラブ設立」と、もうすでに一面の真ん中に、よみうりランドにセンターをつくるというものになっているんですね。それで、このところは記憶が定かではないんだけど、野津さんが読売に話を持ちかけたのは間違いなく 1968 年 11 月です。10 月の終わりに銅メダルを取っているの。そうすると 1 ヶ月の間に、読売グループの間でやることを決めて、正月の 3 日に、こうやって発表しているんですね。読売サッカークラブは 10 月にスタートしました。

それで、ちょっと話が行ったり来たりするのですが、そのころ読売サッカークラブの延長上で言いますと、1970 年に先ほど牛木さんの話にも出ていた小林與三次(よそじ)さんが、読売新聞社から日

本テレビへ社長として来られますが、この読売サッカークラブを創設するとき、小林さんも読売新聞社の幹部として関わっておられます。小林さんはこのことについて理解され、やろうということに賛同された、ということの後を聞いています。

2．全国高校サッカー選手権大会テレビ放送開始以前の日本テレビの状況

小林さんが日本テレビに来られたときに、プロサッカーのクラブはできたが、そこへ選手を供給するのはどうするんだと。つまり、クラブだけで来て、選手をどういうところから持ってくればいいのか、ということです。中学がいいのか、高校がいいのか、大学がいいのか。プロクラブに選手を供給するところを、日本テレビとして何かやらなければならないんじゃないかという話が1つありました。

それからもう1つは、余談ですけど、正力松太郎さんは北陸の富山出身です。私と同郷です。私は学生時代の4年間、県の学生寮にいました。県の学生寮は、富山出身で成功された方が理事として、寮の運営にいろいろとアドバイスしたり、資金の援助をしてくださるんです。正力さんも理事の1人でした。それで、私が日本テレビに入社が決まったとき、寮長さんが、正力さんが理事だから連れて行ってやると言われて、ぼくは入社前にほんの5分くらいだったんですけど、正力さんに会いました。そこで言われたことを2つ覚えています。1つは、日本テレビは、日本のテレビのパイオニアだと。1953年にNHKと日本テレビが最初にテレビ放送を始めるんですけど、そういった気構えで仕事をするように、と言われたのが1点。2点目は、テレビは文化の担い手であるという使命感を持ってやってほしいと。2つのことを言われて、緊張して聞いていたことを思い出します。

小林さんも実は富山出身の人で、東大の学生時代に正力さんのお子さんの家庭教師をされていたんです。そういう縁があって、正力さんの長女と結婚されました。小林さんは東大を卒業され、自治省に入られ、自治省の事務次官にまでなられた方です。自治省の事務次官の中ですごい3人がいる中の1人だと聞いています。事務次官を終えられた後、正力さんが読売新聞に後継者として迎え入れられました。日本テレビに来られて、正力さんは野球というスポーツを、日本の国民というか、青少年のために、それは大義名分であったとは思いますが、やったと。小林さんも、テレビを通じて青少年の育成に役立つことをしたいんだけど、何かあるのだろうか。やるものは何であろうかという話が、片一方ではありました。

正力さんは柔道をやっておられた方です。また、当時の役員で柔道をやっていたことを自慢される方がいて、柔道なのか、サッカーなのか、どっちが良いんだろうということのご下問を受けて、サッカーはワールドワイドなスポーツなんだということを書いて出しました。それも、その時代でした。

それからもう1つ背景としてあったのは、1965年から巨人軍の9連覇が始まるわけです。川上さんの野球で、1973年に9連覇を達成するんですけど、1970年以前から、川上野球は面白くない、石橋を叩いて渡るような、なんか憎らしい勝ち方をする野球で、テレビの視聴率がどんどん下がっていききました。巨人軍は強かったんですけども、TVの視聴率が下がってきた。そんな時代でした。

3．1971年1月からの放送開始に至るまで

日本テレビは、プロ野球以外に新しいソフトはないかというのを探し求めている時代でもありました。そういう背景の中で、「高校サッカーをやろう！」。日本テレビの中にはなんとなく気運が高まっていきました。企画書を、いろいろと書いていたんですが、牛木さんにもいろいろとお力添えいただきました。

その当時の高校選手権と総体は、先ほど牛木さんがおっしゃった通りです。私の先輩で、亡くなら

れた笹波さんは、北海道の室蘭でサッカーをやっておられ、戦争にも行って、社会人で転職をして日本テレビに入ってこられて、大変サッカーの好きな方でした。一方、日本サッカー協会の会長は野津さん（野津謙）で、専務理事は小野さん（小野卓爾）でしたが、この小野さんも北海道の室蘭出身ということを知っていたのですが、こういう縁で小野さんと笹波さんは大変に仲が良かったですね。それで、ぼくは笹波さんに連れられて、小野さんにこんなことがやりたいんだとお願いに行きました。

当時の選手権は、決勝はNHKがやっていたし、総体はNHKのイベントになっていましたので、今やっているものでは難しいと。それでも執拗に言っていましたら、小野さんは、テレビの将来性については大変認識しておられましたね。でも、何か日本テレビの覚悟のほどを見せてくれないと、理事会に出して検討することはできないと言われました。

そこで、笹波さんとそれを持ち帰って、どうしたらいいのだろうかと。そういうことがあって、そのときの企画書を見ますと、1969年10月にスタートした読売サッカークラブのグラウンドを使って、1970年8月に高校サッカー研修大会というものをやりました。高校のサッカートーナメントをやったのですが、全国のいろいろなところから11校を招待しました。準決勝と決勝は全国放送をやっていきます。

その大会が大変うまくいったというか、存在感のある大会になったのは、前年3冠王になった浦和南高校が参加してくれたのが大きかったです。これは、私が松本暁司監督へお願いに行き、参加していただきました。1970年というのは、先ほどお話ししたように、4月から日本テレビは「赤き血のイレブン」を放送しているのですが、浦和南はこのモデルなんですね。当時永井良和君がいて、彼がヒーローのモデルでもありました。そういうこともあって、日本テレビが「赤き血のイレブン」を放送しているということは、松本暁司さんを説得するには大変よかったですね。「テレビでやったら、もっとサッカーはよくなる」とか、若気の至りでしかた言っていました。というのは、私が日本テレビに入社したのは1963年ですから、入社して7年くらいのころということで、30歳前なんですよ。そんなのがとにかく、したいことを怖さ知らずで、がむしゃらにということで…。笹波さんに尻を叩かれ、あっちへ行け、こっちへ行けと言われてやってきた中で、この松本暁司さんが率先して、「よし、坂田くん。これからはテレビの時代だ。出てやるよ」と、言ってくださったのは大変大きかったです。

放送された大会を見ていて、小野さんはテレビに対する将来性というのを感じておられました。そんな中で交渉した結果、その年の暮れ、1971年1月の全国選手権大会から、日本テレビが日本サッカー協会と、全国大会について3年契約を結びました。

当時は西宮で行われていました。私も高校時代（富山中部高校）に、弱い高校でしたけど、3年間西宮時代の高校選手権に出ているのですが、ぼくのころはサッカーとラグビーが1日おきでした。サッカーを1日やると、次の日はその会場でラグビーをやる。そのころ、応援なんてほとんどいない時代でしたから、同じ県のサッカーチームとラグビーチームをお互いに応援に行き、それがせいぜい自分たちの応援団だったというのを覚えています。

そして、1971年1月の全国大会から日本テレビで放送することが決まりました。小野さんは、これまで決勝戦はNHKが放送していたので、NHKの了解を取らなければならないということで、1970年の暮れにNHKに行きました。けれど、NHKはすでに放送の予定を立ててしまっているのです、それは下りることはできないということでした。それで、この1971年1月の決勝戦は、NHKと並列で放送しました。その年の全国大会は16チーム。16試合あった内の8試合を、日本テレビの系列14局で放送しました。

4 . 民間放送 31 局による共同制作

ちょうど同じころ、広告代理店の電通で、夏の甲子園と同じ方式でサッカーができないかと動いている人がいたんです。鍋島さんという方なんですけど、高知出身の方でした。鍋島さんは、同郷の先輩で、筑波大学の名誉教授、高知の大学の学長もされ、現在高知県サッカー協会会長の成田十次郎さんに相談に行っています。当時成田さんは教育大の教授をしていましたから、教育大の関係者ということで、全国高体連のサッカー部部長である松浦利夫さんとか、日本サッカー協会の理事をされていた、教育大の先輩である小長谷亮作さんを紹介しました。小長谷さんはキャノンの役員までされた方です。電通の鍋島さんは、高体連サッカー部の方々と、サッカーの甲子園ができないかと相談していたのが、ちょうど同じ時期なんですよ。

日本サッカー協会と私たち日本テレビが3年契約を結んだ後で、高体連が電通と高校選手権のテレビ中継を企画しているので検討してくれと、松浦さんが企画書を日本サッカー協会に出したんです。それで、日本サッカー協会は困ったんですよ。すでに日本テレビとそういう話になっているのに、なんだか似ているようで似ていない…。電通の考え方は、テレビでやるということを前提としていましたから、小野さんは、日本テレビと電通との間で共通点を見いだして、一緒にできないかということを考えました。そこで小野さんが斡旋することで、日本テレビと電通の間で話し合いが持たれたのは、この1971年1月の大会が終わってからです。71年の春ごろにそういう話になりました。私たちは、日本サッカー協会からは電通からそういう話が来ていると聞いていましたけど、電通からは日本テレビに話がありませんでした。というのは、今もそうなんですけど、電通とTBSの関係は、電通と日本テレビよりも深い、ずっと電通とTBSというのは、仲の良い関係で推移していました。そういうことで、電通はこの事業をTBSのテレビ局の系列局でやりたいと。それが1つ。

もう1つは、テレビの基幹局、例えば、静岡は静岡放送、熊本は熊本放送、長野は信越放送、それから岩手は岩手放送、こういったところの高校選手権の県決勝は、それぞれ例えば、静岡放送杯、熊本放送杯、信越放送杯、岩手放送杯といった形でそれぞれやっていました。地方の高校サッカーは、TBS系列が大変強かった。それはつまり、ラジオ放送を早くから始めていたTBSの系列局は、テレビが始まるとすぐに、ラジオ・テレビ兼業局になっていたからです。

そういうことで、実はTBSと電通の間でいろいろ話し合いが行われていたんですけども、結果的に言うと、「TBSはサッカーをやりません」ということになって初めて、電通は日本テレビと話をするようになったんです。日本テレビとしては、日本サッカー協会と契約をしたときは、日本テレビの系列局で、となっていたんですが、高体連と電通と日本テレビが話し合い、全国すべてをカバーしよう。高校野球は全国をカバーしている。全国すべてカバーすることが条件ですよ、ということになっていった。さあどうしよう、ということになったときに、電通が手当てをするから、全国のテレビ局の共同事業でやったらどうか。その幹事を日本テレビがやるのはどうかということになったんです。それで、最初の1971年度の大会というのは、全国民間放送31局。これには、日本テレビの系列局あり、TBSの系列局あり、それから地域のUHFの局あり、それから福島県など日本テレビ・TBSの系列局がないところはフジテレビの系列局が入りました。系列局が入り組んだ形で、高校サッカーのネットワークというものを作りました。ですから、日本テレビは幹事ではありますが、全国の民間放送局31局が共同で制作するテレビ事業にすることに決まったんです。それが9月に決まりました。タイムリミットは9月でした。それはつまり、全国で一番早い北海道の代表が決まるまでに決めないと、テレビ事業はスタートしないからです。

5 . テレビ放送の形式

このテレビ事業の方式というのは今も一緒なんです。その当時、1970年度が16チームで、次の年度には24チームになります。24チームというのは、全国都道府県から1チームではなくて、地方の地域予選が、都道府県大会の上にあります。それで、どういうテレビ放送の形式かという、都道府県の決勝は、必ず地元の放送局によって放送される。これが1つ。地域の大会、例えば、東京の場合は都から1校出られることになっているので問題ないのですが、北陸の場合ですと北陸3県で1チーム、つまり富山、石川、福井で1チームしか出られません。なので、地域の代表決定戦が行われず。そうすると、それぞれの県の代表が戦う地域の予選の戦いは、必ず県で放送される。つまり、それぞれの地元のチームが戦っているときは、必ず放送すること。そして、決勝戦は3つの県すべてで一斉に放送すること。今度は全国大会です。全国大会は、準々決勝以前は、戦っているチームの地元が必ず放送すること。準々決勝からは全国ネットで放送する。

まあ言ってみると、例えば富山から出たチームの試合を東京で放送しても見る人がいない。そういう、サッカーがマイナーという時代でした。でも地元の関心が高いということで、そういう方式でやりました。

一応日本テレビを含めた全国の民放、電通、高体連サッカー部、日本サッカー協会のもとで9月に決まって、さあやりましょうということになりました。電通はスポンサーに、ゼロックスとブリジストンの2つを探してきました。当然スポンサーは喜んで付いてくれたわけではありません。これは電通の鍋島さんの努力なのですが、今で言えばCSR、企業の社会責任とか社会貢献とかがなければ21世紀の企業は成り立たないと言っていますが、その時代は企業もみんなそれぞれ経営が大変な時代だったわけですけど、若者たちのために、一つ力を貸してくれないかと。言ってみると、寄付をしてもらう感じで集めてきたんですね。ですから、民間放送も、もちろんスポンサーをつけてもらいましたけど、儲けなしです。これは割と最近まで、もしかしたら今でも儲かっていないと思います。たぶんトントンでよくできたなど。割と最近まで、みんな持ち出しです。でも、これは局にしてみると、やはり地元に対して何かアピールできるイベントを抱えておくことが大事なんだからだと思います。その姿勢は、スタートからずっと続いております。

6 . 1971 年度の全国選手権予選をめぐる

1972年1月に、大阪の長居で決勝戦が行われました。1972年はちょうど長居に決勝戦の会場が変わった年、それから24チームになった年ですけど、21試合をテレビで中継しております。

ちょっと余談なんですけど、北海道の代表が決まるのが一番早いと思われていたんです。それでスタートしたところが、もうすでに県の代表を決めているところがありました。富山県です。それで、大騒動になりました。鍋島さんはスポンサーに対して、約束をきちんと守るということで、それが1つでも崩したら「坂田さん、成り立たないから」と言いました。富山県というのは、ぼくの出身地です。それで、「お前、富山にすぐ行って、とにかく県の決勝をテレビでやり直しさせろ」という話になりました。

ぼくの恩師が県の理事長でしたし、県の協会の人たちともいろんな関わりがあって、会長と恩師の理事長に集ってもらい、いろんな話になりました。でも、1回決まったものをどうするんだってことがあったんですけど、最後は折れてくられて、壮行試合をやることになりました。県の決勝まで行った1位と2位のチームが、3県の大会に出る。それで、県の1位は他県の2位と戦うというような組み合わせに決まっているんですね。にもかかわらず、とりあえずとにかく壮行試合であるということと、県の代表としてAを取るかBを取るか...。まあ、1位と2位は決まっているのに、3県の組み合わせのAを取るか、Bを取るのかを、その壮行試合の勝ち負けで決めるということで。実際に

は決勝戦をやり直ししてもらいました。富山工業高校と魚津工業高校です。

何故富山県が早かったかということ、富山は進学率の高いところで、当時あまり私立学校というのがなく、公立高校が多かったものですから、早く全国大会に出るチームを決めれば、3年生が受験勉強できるというのが1つです。それから、秋に国体があって、早めに決勝をやっておかないと、国体以後になってしまうので、みぞれが降ったりして気候が悪くなってしまうということも1つありました。高校総体が終わったらすぐやっちゃおう、国体の前にやっちゃおう、ということでやったんですね。それで、優勝していた富山工業高校が、ブロック大会でも楽な組み合わせになるはずだったのが、テレビの試合では魚津工業高校が勝って、魚津工業が他の県の2位と戦うところからスタートしたために、ブロック代表になってしまったんですね。その年、富山工業高校に大変悪いことをしました。でも、とにかく、テレビになったらいいことがあるんだ、と説得して。今だったら、いろんなメディアに叩かれると思うのですが、何事もなく、それによってぼくは面目を施したんですね。

もう1つ、これも余談ですけど、その年の東京大会の決勝。これはよみうりランドでやりました。これは当然テレビ中継をしなければなりません。忘れもしないんですけど、帝京高校と桐朋高校。お客さんは300人くらいでしたかね、それだって、いろいろとお願いに行って。そしたらアナウンサーが、「300人の大観衆が」って何回も何回も（笑）。まあ、取材に回っていても、高校サッカーの試合に100人が来るっていうことはなく、300人来ただけでもそのアナウンサーは感動して、300人集まってくれたっていう思いで…。グラウンド中に実況が聞こえるんですよ。本当そんな感じでしたよ。

7. 高校選手権大会首都圏移転の経緯

電通は最初から東京でやりたいという意思表示はしていました。日本テレビは必ずしもそうではなかったんです。ぼくも3年間西宮で戦った大会でありましたので、長い間、関西の人たちがボランティアで大会を育ててこられたということもよく分かっていましたので、最初はそんな気持ちはなかったです。でも、テレビで始めたときは、もちろん小林社長の肝いりとかいろいろありましたけど、必ずしも社内はそんなにみんながやろうということでもありませんでした。ちらちら後ろに小林社長の、とかいろいろを言っていましたけど、皮肉も言われました。視聴率も取れないのにやってどうするんだとか、そういうこともありましたから、早く何とかみんなに認めてもらえるような大会になってほしいと願っているいろいろなことをしました。

いろいろな活動をしてきましたけど、高校野球なんですね、大阪は。どういう話をしていても、高校野球っていうのが第一にあって、何とか高校サッカーを、という話にはなかなかいけません。だんだん、「大阪でやっている限り、大会は発展していかないな」というふうにぼくもなっていました。あとでここのところの話をしますけど、首都圏に移るのは1976年度、1977年1月の全国大会からです。

1974年に西ドイツでサッカーのワールドカップがありました。ぼくは牛木さんをお願いして、読売新聞社の取材の許可を取っていただきまして、1次リーグだけでしたけど牛木さんにくっついて見て回ってきました。もちろん日本からもいっぱい取材の人が来ていて、そういう人たちとつるんで食事などをしていました。そういう中に、サンケイスポーツにいらっしゃった賀川さん（賀川浩）も取材に来ていて、ぼくも酒を飲んでうっかりしていたんだと思うんですけど、「大阪の高校サッカーは東京じゃないと駄目だよ。何とか東京に持っていかない」と言ったらいいですよ。自分ではよく覚えていないですよ（笑）。そしたら賀川さんはその晩すぐ、国際電話で、当時関西サッカー協会の会長で、本当にこの大会を育ててこられた、日本サッカー協会の副会長でもあった川本泰三さんに電話したんですよ。

実は関西でサッカーのこのテレビ事業を始めた 2 年目のときに、川本さんから声がかかって、「素晴らしいことをやってくれた。ありがとう」って。それから大会が始まる前に料亭に連れて行ってもらってご馳走になっていたんです。それが 74 年にそういう話になって、もちろんそのころからそういう動きが高体連の松浦さんとかを通じていろいろやっていました。...川本さんに叱られましたね。それでも、「お前とは絶交だ！」って言われて、それから 1 回大阪でやって、一緒に並んだりしたんですけど、挨拶をしても知らん顔をされて...。厳しい方でした。

東京に持ってくるのは大変でした。それは当然ですよ。大正 7 年、1918 年から延々と関西の人たちが、お正月の休みを返上してやってこられたわけですから。後にサッカー協会の会長になられる、京都府サッカー協会会長だった藤田静夫さん。当時も日本サッカー協会の理事をされておりましたけど、藤田さんが関西で唯一テレビのことを分かってくさいました。何で関西が駄目だったかということ、高校野球というのがあるから、実際の現象面でいうと、お客さんが集まりませんでした。これが一番です。やはりお客さんが集まっていけないようなものを、テレビで見ようとは絶対にしない。後で観客動員の話はしますが、そういうこともあって、お客さんが集まるようなところでやらないと、っていうのがありました。もちろんいろんな手段は講じましたけど、やはり関西はサッカーに馴染みがないんだなって、つくづく思ったんですね。東京に持っていった方が、サッカーのお客さんが集まるんじゃないかと。これは高校サッカーの予選とかをぼくらがやって、もちろんマーケットリサーチなどをやりました。それで、東京に来たら何か違うなっていうのがあって、そういう客観的な資料というのを示さないと、「日本テレビは東京だよ。東京でやったら仕事しやすいんだよ」ということをいろんな人に言われもしたんですけど、そうじゃないんだと。「東京に行ったらこの大会を素晴らしい大会にします」、みたいなことを言って、1975 年の夏、だから移る 1 年前の夏の高校総体の前に、全国高体連のサッカー部会で承認してもらいました。このときの松浦さんのスピーチは、忘れもしません。松浦さんは、もう亡くなられましたけどすごい人で、いろんなところへの根回しとか、自分の後継者を育てるとか、そういうところの素晴らしい人でした。もうすでにいろんな部長さんたちに根回しして、最後は拳手を求めるようなところになっていたんですけど、テレビで放送したらどう変わるのか、高校サッカーが変わるといのは、日本のサッカーをどのように変えるのか、という話を、大演説を行ってくれたんですよ。ぼくは頭の下がるような思いで聞いていました。

それから一つ言っておかなければならないのは...。塩見さん、いま全国大会に読売新聞社は後援に入っていますか？

塩見：はい、入っています。3 年目くらいです

テレビ事業をスタートするときに、新聞社を絶対に入れないと。まあ、日本テレビは読売新聞社のグループですから、新聞でも応援してもらいたいというのはありましたけど、電通は、読売新聞はまずいと。新聞社を入れないでやりましょう、ということで、ずっと新聞社はこの事業に絡まないできました。何故かということ、地方のテレビ局はみんな地方の新聞社と資本を一緒にしているんですね。例えば、静岡放送は静岡新聞と同じ資本なんです。そうすると、読売新聞の名前が付いてしまうと、静岡新聞は、静岡放送がやっている高校サッカーの記事を大変書きにくくなってしまうということがありました。読売新聞は全国紙ですが、それぞれ地元で一番読まれている新聞、地元のテレビ局と資本を一緒にしているところの力というのは、販売部数を見ても全然違うんですね。ですから、新聞社は一切入れないで、それぞれのテレビ局がそれぞれのところでやろうということで。もちろんぼくらは、東京の大会とか高校のチームの遠征とかいろいろと読売新聞にお願いはしましたけど、それはそれぞれのテレビ局がそれぞれの立場でやりましょうというようなことで、全体的には新聞社が絡まないでついこの間までできていたんです。どういうことで読売新聞社が後援に入ったのかはぼくは知りま

せん。ずっと前に終わっていますから。でも、プログラムを見たら突然、あれって思ったのは確かです。すいません、後で教えてください。

それで、また飛び飛びになりますけど、川本泰三さんの話です。川本さんは日本サッカー協会の副会長ですから、東京でも会います。必ず決勝戦はロイヤルボックスで見えおられました。もちろんその周辺で行き会うことはあるけど、全然知らない人みたいな感じですよとすれ違われます。ぼくも本当に目のやり場に困っているような感じでした。

79年か80年かはっきりと覚えていないんですけど、ぼくが遠いところから見ていて、川本さんが来ているなと思っていると、そしたらぼくの方を向いて手招きされていたんですよ。これまでの関係から、ぼくのことを手招きしているのだと思っていたいわけで、ずっとこっちを向いて手招きをしているんですが、それでも信じられなくて。でもそれで川本さんのところへ行ったら、「東京に持ってきてよかったな」と言ってくださいました。...頑張りました。東京に持ってきたときから決勝戦は超満員にしました。そういうものを続けて見てこられて、やっとそうおっしゃっていただいて挨拶はできるようになりました。そんなこともありました。

8 . スタンドを埋めるために

スタンドを埋めようというのは、テレビ放送を始めたときからぼくが願っていたことです。当然高校サッカーというのがテレビの視聴者の対象になることは、最初から端から思っていなかったです。まあ関係者は見てくれるでしょう。だけどぼくらは関係ない人に少しでも見てもらうような放送をしようというのがありました。ではどうやってみてもらおうのか。テレビのチャンネルを動かして、たまたま映った映像に、「スタンドがガラガラで、でも選手が一生懸命やっている」というのを見てもらえますかと。やはりスタンドを埋めないと、というのが大変大きなテーマでした。

まず、出場チームをお願いに行きました。学校関係、校長先生、生徒会長、PTA会長、サッカー部の父母の会、OB会、そういうところをお願いに行きました。職員会議にも出ました。それは、ある校長先生が、何故サッカー部だけ特別扱いをするのかという先生がいて困っているということで、私が職員会議に出て話をさせてくださいと言って、話した高校もあります。それから、全校で応援にきてくださいという話ですから、國學院久我山高校でしたが、そういったことは生徒会が決めることになっていますので、生徒会と話をしてくださいということになりました。生徒会長と会ったら、役員全員集めますからと、高校生を集めて話をしたりもしました。あるところでは、全国大会に来てください、とお願ひしたところ、バス代くらいは出してくれるのですかと、いくらか援助してくれるのでしょうかと言われましたが、それは出せません。でも、もし甲子園の高校野球が出たら絶対に行くでしょ、高校サッカーも来てくださいよ、と言って回って、本当にきりきり舞いでした。全国をかけずり回りました。

それでも、全国大会はやはり遠いところの学校の応援団は来られませんよね。それから当時高校サッカーに学校の応援団を連れてこないところもいっぱいありました。そこで、関西の大学の応援団にアルバイトのお願いをしました。立命館大学の応援団は自分で交渉に行ったので覚えています。応援の来ない高校の応援をやってもらいました。ですから、最初のうちは、フレイフレー 高校と言っていたのが、第2試合になったら別の高校の名前を言って応援をしていました。そういうふうにして、何とかテレビに映るスタンドを賑やかにすることを一所懸命やりました。

地方大会の解説にセルジオ越後さんと呼んだり、名のある人呼んで、事前に地域の子もたちにサッカー教室をやり、そういう人たちに高校サッカーの決勝をスタンドで見ってもらうということもやりました。チケットを商店街のセール景品に付けたりとか、いろんなことをやりました。今考えるとおかしな話なんだけど、こういう監督もいました。「観客が多くなると選手があがってしまって、い

いプレーできないから、観客なんて来なくていいんです」と。こういう監督が、全国大会に出てきている方の中にもいたんです。信じられませんでした。

9 . 放送研修会

先ほど申し上げましたように、全国で放送する仕組みを作らなければならなくなりました。地方のテレビ局にとって見れば、サッカーの中継を1回もしたことのないような局にも、県の決勝の放送をするということが決まっていたんです。31局のうち、サッカー中継をしたことがあるという局は10局なかったでしょうね。ですから、カメラはどのように置いたらいいのか、アナウンサーは何をしやべったらいいのかも分からないんですよ。それで、ぼく宛に一日中電話がかかってくるんです。

高校のグラウンドで決勝をするんですけど、カメラをどういうところにどうやって置いたらいいんですか、アナウンサーの用語辞典はありますかとか。そういうのでぼくは仕事にならない状況になって上司に相談したら、東京に集めろと。

ということで、よみうりランドに、1971年10月にアナウンサー、ディレクターを集めて研修会をやりました。3泊4日です。とにかくみんなそこで勉強したらすぐ帰って放送です。30局から63人の人が参加しました。ぼくが全部プログラムを組みました。実技もやりました。指導は日本代表の監督とコーチです。長沼さんと八重樫さんに来ていただきました。サッカー用語は、今は亡くなりましたけど、多和健雄さんという、教育大学の教授をされていた方に来ていただいてやってもらいました。放送フォーマット、カメラ位置、それからどうやって画づくりをするか。ぼくが1人でやりました。でも、やってよかったですね。

それから、それ以前に放送したサッカーのビデオを持ってきてもらいました。今でも忘れないんですけど、確か青森放送だったと思うんですけど、うちも高校サッカーをテレビで中継していますということで、持ってきてもらったんです。みんなで見ました。そしたら下手なんですよ。青森だから特にかもしれないんですけど(笑)。解説者が、「あー、またミスをしています」、「あー、またキックミスですね」。つまり、そういう放送になるんですよ。ぼくはそのときに、実技にそのような意図はなかったんだけど、でも実技で、サイドキックはこのようにやるんだとか、ボールを遠くに蹴るときにはこうやってやるんだとか、ヘディングとかやっていたら、次の日にみんな頭が痛いとか、階段が上がれないとか。そうすると、ボールを蹴ること自体がどんなに大変かっていうことが、アナウンサーの人たちは分かったんですね。そういうことを何年間か繰り返しているうちに、「あっ、あそこに蹴ろうとしたんですけど、ちょっとキックミスをしましたね」、とか少しプレーしている側の意図というのが放送の中に反映されるようになってきて、実技っていうのは本当によかったですね。

そういう中で、ぼくって「おもしろがってやろうよ」という質の人で、まあテレビの人っていうのはこういう人が多いんですけど(笑)。みんなで何かおもしろいことができないかなと思って、こんなことをやりましたね。みんな研修会が終わったら1人1000円ずつ置いていって、全国大会で優勝したチームのテレビ局がゲットするっていうことをしました。最初に優勝したのは、浦和市立高校。清水秀彦くんがキャプテンで、決勝で1点入れて勝ったんですけど。そのころはまだテレビ埼玉ではなくて、日本テレビが埼玉をカバーしていたんで、ぼくがゲットしました(笑)。もちろん浦和市立高校にボールを買って、これはそういう賞金ですと言って渡しました。

そういったこともやったりしました。研修会は今も続いているんですね。抽選会が終わった日にみんな集まって、たぶん今は1泊2日くらいになっていると思うんですけど。でも最初は3泊4日で、それも朝8時から夜の10時くらいまでやりました。みんなとにかく、帰ってすぐに放送しなくてはならないのですから、これは本当に大変でしたね。だから必死でしたね。

10 . 高校サッカーの歌

テレビ局ですから、こういう事業が始まると何か歌をっていうふうになるんです。最初は「青い三角定規」というグループがあって、「太陽がくれた季節」という歌だったと思うんですけど、高校サッカーの歌としてやりました。

1、2年して大阪の時代に、公募しました。一般の人に関心を持ってもらおうという1つの手段ですよ。そしたら、松本深志高校のOBで、20回卒だと言っておられましたけど、金原徹郎さんという方が応募された、「大地に顔をくっつけて」という詩が採用されました。ぼくも選考委員の1人でしたけど、とてもいい詩です。これを阿久悠さんに補作してもらって、森田公一さんに作曲をしてもらって、高校サッカーの歌として、大阪の時代に使っていました。「大地に顔をくっつけて、大地の匂いをかいでみる、汗と涙のしみこんだ、大地の匂いをかいでみる」という歌です。

それから、1976年度に首都圏に持ってくるようになって、イメージチェンジをしようということになって、阿久悠さんに詩を頼みました。ぼくは依頼をするにあたって、1回だけ阿久悠さんに会いました。阿久悠さんは、「坂田さん、サッカーの中継のディレクターで一番大切なことは何ですか」と。何のことだかよく分からなかったんですけど、ぼくは、今もそうなんだけど、スポーツの中継は必ず勝敗が決まります。当然勝った方は称えられます。勝った方は何を撮ってもいい画が撮れるんですね。ぼくはディレクターの能力は、負けた方のいい画、これは主役ではありません。あくまでも勝った方が主役です。だけど、負けた方のいい画をいかに撮るか。例えば地面にうずくまっている選手がいました。アップで撮る。ひいた画で体全体を撮る。もちろんアップで顔の表情を分かるようにすることもあるだろうけども、ぼくはちょっとひいたところにディレクターのセンスを感じますね。それで、ぼくは阿久悠さんにそういう話をしていました。それが「ふり向くな君は美しい」です。

うつ向くなよ。ふり向くなよ。
うつ向くなよ。ふり向くなよ。
君は美しい。
戦いに敗れても、君は美しい。
今ここに青春を刻んだと、
グラウンドの土を手にとれば、
誰も涙を笑わないだろう。
誰も拍手を惜しまないだろう。
また逢おう、いつの日か。
また逢おう、いつの日か。
君のその顔を忘れない。

うつ向くなよ。ふり向くなよ。
うつ向くなよ。ふり向くなよ。
君は美しい。悔しさにふるえても、
君は美しい。
ただ1度めぐり来る青春に、
火と燃えて生きてきたのなら、
誰の心も打てるはずだろう。
誰の涙も誘うはずだろう。
また逢おう、いつの日か。
また逢おう、いつの日か。
君のその顔を忘れない

そして三木たかしさんが作曲してくれて、首都圏の大会から披露しました。ぼくはこの詩をもらったときに、本当に素晴らしいなって思いました。いい曲も付きました。もうこれは徹底的に広めることが大切だと。やっぱりテレビ局ってすごいんですね。徹底してやるってなったら、あっという間に全国に。でも残念だったのは、先日阿久悠さんが亡くなられて、もちろんピンクレディーの歌とかいっぱい流れたときに、この曲が出てこないんですよ。日本テレビでやっているのに。だからぼくは電話しましたよ(笑)。そしたら取って付けたような…。でもこれは阿久悠さんの中でもいい曲で、これ以上のものがないから新しいものが出てこないんだと思いますね。ぼくはそのくらいいい曲だと思っています。バースというグループに踊らせたりして、松浦さんが何でグラウンドでそんなことをやらせるんだとか、いろいろありましたけど。でも、徹底してやりました。

11. ポスター

ポスターも工夫しました。ポスターにキャッチフレーズがあって、「盗まれるようなポスターにしよう」と。まあそんなことをやって、今日たまたま牛木さんが、共通の友人からことずかっただちであって、ああそうだと思ってお見せしようと思ったものがあるんです。一番最初、日本テレビの系列だけでやったときのポスターです。これなんですけど、「いま、君がこのボールをけるのだ！サッカー時代が来た！」。これは国立競技場の芝生です。ぼくも一緒に撮りに行きました。センターサークルにこのボールを置いて。これが1回目のポスターです。

その後は、プレー中のポスターです。これは1975年の「青春がつかむ感動 - 」とか。こういうキャッチフレーズを、ぼくもいくつか考えたことがあるんですけど。これは全国の31局で、電通と一緒に始まったときの第1回のもので、これも「いま、君がこのボールをけるのだ！」と。この設定がボールを蹴る瞬間の写真で第2回目のポスターです。これは帝京高校のゴールキーパーにやってもらって撮ったんですけど、「君がめざす青春のゴール！」と、キーパーがセービングしているんですけど、届かないでボールがゴールに入る瞬間の画です。

このときから今もそうですけど、キックしているサッカーのマークが使われています。これも当然、歌であるように、それからポスターであるように、当然テレビ人は考えるんですよ。これは日本テレビのデザインを担当している人がつくりました。そしてその方の好意で、日本サッカー協会が高体連サッカー部に著作権を委譲しています。これは日本テレビを割と早く辞められて、東京芸術大学の教授になられた、内山昭太郎さんの作なんです。

12. その他

その他に、サッカーマガジンとかイレブンとか、当時からサッカーの雑誌というものがあまして、テレビをみている人が前に置いて見るとよく分かるというようなものを出してもらおうと思って、別冊をお願いに行きました。金も出さないで、でもテレビのためのものを作ると本も売れますからと、本当に口だけでやりました。

これはぼくもクリーンヒットだと思っているんですけど、『高校サッカー年鑑』がありますよね。これは当時講談社のスポーツ出版部というところに風呂中くん（風呂中斉）がいて、私の教育大のサッカー部の後輩です。修道高校のゴールキーパーで、選手としては高校時代はよかったのですが、大学では試合に出るような選手ではありません。彼は小さな出版社に勤めていたんですけど、大宅壮一の学校に通って、そして講談社に転職してスポーツものをいっぱい作っていました。サッカーマガジンとかイレブンをお願いしたような別冊を、講談社の風呂中くんのところを出してくれないかに行ったのが最初なんですけど、企画がだんだん膨らんで。さっき聞いたら牛木さんもいろいろと知恵をつけられたと聞いているんですけど、これはテレビからお金を出さなかったら誕生しなかった。今もたぶんテレビ局からお金が出ています。全部出ているわけではなく、一部ですけど。当然広告から出されていますけど、これは最初作ったときに松浦さんに大変喜んでもらいました。「高校のスポーツでこんな立派な年鑑ができるなんて、いいものを作ってくれてありがとう」と言って、とても感謝されたのを覚えています。

解説者。テレビ局は少しでも視聴率を上げようと思って、解説者にできるだけ著名人をお願いしています。当時で言うと、岡野さん、長沼さん、八重樫さん、釜本さん。最初このような方でやりましたが、視聴率がよくないんですよ、そういう人でやっても。それで考えを変えました。

これは、ぼくがすごくいろんな自慢をしているようなんですけど、こういう場でなければ言いません。あえてこういう場だから言いますが、研修会でみんなで申し合わせ事項にしました。地元で本当に

一生懸命サッカーを普及、強くしようとしている人から選ぼうと。視聴率はあまり変わらないんだから、話の上手い下手は関係なくそうしよう。これは何でかということ、今テレビの解説をやったって尊敬されるか分からないけど、そのころはテレビの解説をしているというと一目置かれます。だいたい教員の方が多いんですけどね。教員の人たちって、サッカーの活動ってみんな自分で休みを取ったり、校長先生に「申し訳ありません」みたいなことを言って出ていた時代なんです。今は胸を張って公費で出張でできるかもしれませんが、そういう時代でした。だから、何とかそういう人たちの環境をよくしてあげたい。そのために力になれるんじゃないかと思ったんです。そういう人たちを起用しました。そうすると校長先生たちは、あの先生ってこういう解説できる人なんだ、みたいなことがあって理解してもらえるんですね。もちろんアナウンサーも、今日解説してくださっている方はこういう人で、地域のサッカーのために大変ご苦労されている方だとか、説明します。そのあたりを不自然じゃないようにやるというのは、ぼくら演出家の腕なんですけど、そういうふうによることによって、地方で放送する側がサッカー界にエールを送れたと思いますね。

高校サッカーのテレビ中継は、日本のテレビ中継の中で最高の放送にしてやろうと。これは日本の高校生にエールを送る意味で、こういう放送をしてもらってうれしいとか、こういう放送をしてほしいから頑張るとか。選手にエールを送るという意味でやろうと、ぼくらは最初から臨みました。

例えばさっき話したように、1974年に牛木さんと一緒に西ドイツに行った時、双眼鏡でずっと見ていて、ゴール後ろにカメラがあるんですね。あれはワールドカップでも初めてゴールの後ろにカメラがあって、リプレーで…。それで1975年の全国大会から、ゴール後ろにカメラを置きました。日本代表戦とかにそこにカメラは置いていませんでしたよ。たぶん日本代表戦で置くようになったのは、その2、3年後だと思います。

1986年には、メキシコ大会でバックスタンドにカメラがありました。つまり、メインスタンド側から見にくくて、バックスタンド側からだと見やすいもの、あるいはシュートのシーンでもバックスタンド側からだと違った形で見せられるということであったんです。1987年1月の大会に置いたんだけど、これはちょっと角度が視聴者に抵抗感があるということで、もう次の年にはやめました。ディレクターが下手だったということがあったかもしれないけど、視聴者が混乱する画になってしまうのでやめました。

そんな中で苦い経験というのが、1981年駒沢競技場での1回戦、北陽対西目農業の試合です。

話はちょっと飛びますけど、1964年の東京オリンピックからスロービデオというものが、すでにテレビの中では行われている。ですから、高校サッカーもずっとスロービデオというものをに入れてやってきました。ゴール後ろにカメラを置くようになりまして、ゴール後ろは必ずスロービデオ。それから通常放送されている画は、テレビ局で通常放送されている画を撮ってスロービデオで再生できるような形にしました。その試合、北陽が先制点を取りました。先取点を取られてセンターサークルにボールが置かれて、入れられた側が蹴りますよね。ちょっと横に出たボールを、エースの小松くんがボールとボールを蹴ったら直接ゴールに入りました。ゴール後ろのスロービデオは、まだ前に入った得点シーンをキープしていたために、この次の点を撮ってなくて、ですから高校サッカーでたぶんこれだけ長い距離のゴールはないんです。Jリーグはありますよ。ゴールキーパーが蹴って入ったってというのがありますが、高校サッカーではこれが一番なんですけど、これはゴール後ろの画がないんです。正面での画は局で撮っているのであるんですけど、苦い経験をしました。

さっきの研修会の話で、1000円ずつ置いていくという話があって、浦和市立高校のおかげでゲットしました。でも、日本テレビの本拠地は東京。それまで東京のチームは全国大会で一度も優勝していません。青山師範が2位になったのが最高です。3位は何回かあります。帝京高校もテレビ放送を始めた年に、2年連続3位になっているんですね。やっぱり東京じゃないのにゲットしたのは本意じゃ

なくて、なんとか。それに東京のチームが優勝していない、日本テレビがこんなに力を入れているのに。それで東京のチームを優勝させたいというのがすごくありました。どうやったら優勝させられるだろうと。テレビ局が優勝させると言うなんてみんなおかしいと思うでしょ。でも、何かないか、何かないか、と。

東京全体のレベルを上げて、優勝チームをつくるというのは、あまり早くはできない。それは地道ないい方法かもしれないけど、早く優勝させたいと焦っていました。早く優勝させるにはどうしたらいいかと。いろいろと調べました。やはり1つの学校を応援する形が一番いい。2年連続3位になっていましたから、帝京高校の古沼監督のところに行きました。「古沼さん、帝京にぜひ優勝してほしい。何かぼくらにできることはありませんか」と。いろんなことを話しているうちに、2つ。1つは、できるだけテレビ局の人が練習を見に来てください。できれば女性の若いアナウンサーがいいと。なにしろうちの選手はとっばいから、誰か見てたりすると張り切る。張り切る練習をずっとやっていたら、上手くなっていく。そうですね。これは教育方法の中でも割と基本的にあることですよ。人混みの中を走らせたなら落伍者が少なくなる。それがまず1つです。もう1つは、古沼さんは、今は大指導者ですけど、自分でサッカーをやっていない人ですから、彼は浦和南の松本暁司さんとか、習志野の西堂さんとか、静岡の監督さんのところでいろんなことを教わってきて、そういうことを実施しながらチームを強くしてきたんですね。それで、「自分はそういう状態なので、坂田くん、君の先輩で誰かぼくにサッカーの指導力を高めてくれる人を紹介してくれないか」と。この2つのことをおっしゃいました。

それで、1つ目は、アナウンス部長のところをお願いに行き、毎週とはいきませんでしたけど、ぼくら運動部の人間、ディレクターとアナウンサーが交互に帝京に通いました。それから指導者については、松浦さんの後、川口さん、加藤さん、その次に全国高体連のサッカー部部長になられるんですけど、当時学習院の高等科に鈴木勇作さんがおられました。ぼくが学生のときに、OBとして指導に来てくださって、いろいろと仕込んでもらった。なんでそうすることが大切かというのを、実に理論整然と話をされる方です。あの人がいいなと思って、鈴木勇作さんのところに行って、「帝京高校を優勝させるために力を貸してください」ということがあって、帝京に、1週間に1回ずつ、行ってもらうことにしました。

2年目ですね、全国大会で優勝したのは。この年、全国優勝2回の習志野高校は県の予選でもう負けていましたから、監督の西堂さんに解説者として大阪に来てくださいと言って大阪に呼んで、帝京高校の宿舎で、古沼さんと同じ部屋に寝てもらいました。何を話されたのか分からないし、どんな相談をされたのかは分かりませんが、古沼さんは大変感謝しておられましたし、きっと何らかの力になったと思います。

本当はそんなことをしてはいけないんですね、テレビの人が。でもしました（笑）。帝京高校が優勝したときに、鈴木勇作さんは全国高体連の役員として行っていました。やっぱりそうやって指導していたチームですから、ベンチの後ろで見ていたんですね。それで帝京が勝ち越し点を上げた途端、古沼さんが喜んで立ち上がって、ふっと後ろを見たら鈴木勇作さんがいるので、2人で抱き合っ。テレビはそれを撮っているんですよ。それで勇作さんは、松浦さんからめっちゃくちゃ怒られて、サッカー部長になるのを遅らせられたらしいという話も聞いているんです（笑）。

それで優勝しました。優勝インタビューです。もちろん全国ネットですね。初優勝で古沼さんは、涙、涙。もう何を言っているのか分からないくらい。それを宮崎県で中学生が見ていました。こういう監督のところではサッカーをやりたいと言って、帝京高校に入学させてくれと宮崎から出てくるんです。帝京高校が2回目に優勝するのは、その決勝戦を見ていた中学生がキャプテンのときにです。早稲田一男くん、教員にもなって、日章学園の監督で何度か全国大会に連れてきていますが、ぼくがテレビで仕事をしていて一番嬉しかったことです。

テレビは技術を教えるわけではないけど、でもその競技を啓蒙したり、競技力を高めたりするのに

役立つ立場であり得るといのは、ぼくは自分でサッカーをやってきて恩返しのつもりで高校サッカーのテレビ事業を一生懸命やってきただけに、テレビで仕事をしてきて本当に嬉しかったですね。

そんなような話題で締めないと、まだまだ話が尽きないんで。PK戦の採用とか、コマーシャルの問題とかいろいろあるんですけど。

質疑応答

牛木：本当は坂田さんに思う存分話してもらいたんですけど、フロアからも質問やご意見を伺っています。あまり時間は取れませんが、まず、今聞いたところで分からなかったこと、ちょっと違うぞと思った方は、どなたかいらっしゃいませんか。

高橋：高校サッカーのロゴのことですが、私は学生時代に内山先生のもとで勉強させてもらっていました。どういう経緯で内山さんにロゴを依頼する話がいったんですか。

坂田：日本テレビのデザイン部長だったんですよ。それでぼくは何か作ってくださいよ、とお願いしました。そのころから内山さんというのは、大学で教えておられたんですよ。すごい人だったんですが、その頃はそれを知らないんですよ、ぼくは。

高橋：ありがとうございます。

牛木：「大地に顔をくっつけて」「ふり向くな君は美しい」という曲といい、すごくよかったです。これを高体連だけでやっていたら、たぶんやれない。民放が入ってきたからやれたのだと思います。坂田さんの非常なアイデアと実行力がものをいっているわけですけど、まあ坂田さんが高校の先生をやっていたらできないだろうと思います。そういう点で民放が入ってきたのはすごくよかったですなと思います。

牛木：他に何かありますか。

鈴木：大会の優秀選手を選抜して、海外に遠征するというのはどういう経緯で行われるようになったのでしょうか。

坂田：あれを始めたころは、日本人が海外に行くということは滅多にない時代でした。ご褒美であり、大会を盛り上げるための1つの手段でもありました。つまり、そういうご褒美があれば、高校生たちはもっと上手になって、全国大会に出て活躍すれば海外に行けると努力する。こういったことで高校サッカーが盛り上がっていきたくらうと。テレビ局と電通とで少しお金を作って高体連に申し出をしました。最初は東南アジアだったんですけど、でも東南アジアじゃねってのがあって、受け入れてくださるところもあって、最初は西ドイツのスポーツシューレへ行きました。ブルガリアにも行ったり、中国に行った時期もあります。

派遣選手は高校サッカー全国大会の出場選手の中から選びます。全国大会に出られないけど才能豊かなやつはいっぱいいる。そういう人たちも選んで連れて行ったらどうかって話もあったんですけど、テレビ局がお金を出して派遣するんだから、やっぱり全国高校サッカーに関わっている選手でいこうということで全国大会出場選手の中から選ぶことになりました。広くほかからも選抜するのは、サッカー協会が自分でやられたらいいんじゃないですか。ぼくらはご褒美の意味づけでよかったのです。ただ、これはご褒美というだけじゃなくて、サッカーの先進国を子どもたちに見せてやりたいと。そこでみんないろんな刺激を受けてくるんです。帰ってきたら、先進国ってこうなっているんだとか、日本もこうならなければとか、そういう話をします。「日本のサッカーの環境ってよくなるよ」って、これは日本テレビ社長の小林さんの意見です。なるべくホームステイをしるとも言われて実行しました。小林さんはすごく偉い人なんだけど、そういうことを思いついておっしゃいましたね。

牛木さん、北朝鮮に小林さんと一緒に行ったのは何年でしたっけ。

牛木：72年です。1972年の春。高校選手権の遠征とは違うんですけど、その年に優勝をした習志野高校を連れて行きました。これはちょっと陰謀を企んだものです、ぼくたちの目的は、当時なかなか取材できなかつた北朝鮮に入るっていうことでした。入るための手段として、利用したようなものなんです。小林さんという日本テレビの社長を顧問に祭り上げて行ってもらい、向こうで金日成主席と小林さんの会談をすることもできました。というようなことで、高校サッカーも日朝交流に貢献しているんですよ。

坂田：まあ、そういう中で、たぶん牛木さんが小林さんに、いろいろとサッカーの話をされたんだろうと思うんだけど…。ぼくが日本テレビの中でのいるんなことができたのは、小林さんのおかげもあります。テレビ局のなかで、サッカーの話ばかりすると、愉快地に思わない人もいましたが、小林さんの意図が働いているとなると、そう反対も出来ません。ぼくは言わないんですけど、あまり通じないと、「社長もサッカー好きですから役員会で社長に聞いてくださいよ」などと言うと効果があるということもありました。

牛木：坂田さんは非常に上手におっしゃったけど、小林社長の力を利用して何かを通そうっていうことをよくやって…ときどきですか。それを彼らは「お召し列車を通す」と言ったんですよ。「お召し列車」っていうのは天皇陛下のお乗りになる列車のことです。お召し列車を優先的に走らせることにたどえたのです。「お召し列車を通す」ために、社員の坂田さんたちが小林さんに直接言うといろいろと差し障りがあるから、読売に勤めているぼくが行かされたことが何度かある。「お召し列車」の釜焚きをやらされたわけです。その中の1つでぼくが覚えているのは、それまで全国大会は32チームでやっていたのを、全都道府県の代表を入れて48にしようという案が出たときです。それはなかなか大変なんです。半端が出てきたりして会場も多くなる。48代表にしよう小林さんが言い出した。これを、無理だからやめてくれと小林さんに言ってくれと誰かにたのまれた。小林さんは社長ですからなかなか捕まえるのは大変です。料亭の玄関で会ったりと、いろんなことをやったんですけど、「48チームは難しいから、32チームがいいらしいですよ」と言ったところ、「君ね。地方の振興のためにやっているんじゃないか。1県1校は当然だ」と頭ごなしに怒鳴られて、なるほど小林さんはたいしたものだと思います。そんなの日本テレビがお金を使えば解決すればいい話で、そういうことを覚えていますね。

牛木：他に何かありますか。

済木：ビバ！サッカー研究会の済木です。以前何かの文献で、試合時間が40分×2で延長戦なしのPKをするのはテレビが関係していると聞いたことあるのですが、これは事実なのでしょうか。

坂田：事実ですね。これは北陽が優勝した年からです。さっきから何度か話をしているけど、浦和市立の優勝は、そのとき浦和市立は5回戦って優勝したんですが、35分ハーフ、延長が20分。それから決勝戦だけ40分ハーフで延長を20分でやりました。決勝は清水くんのシュートで1-0で勝ったので延長ではありませんでした。準決勝まで70分まで同点。1回戦と2回戦は延長戦をやって抽選です。それでぼくは今でも覚えているんですけど、準々決勝で浦和のベンチの裏で見ていたら、試合前に選手たちが並んで、そして当時埼玉県サッカー協会の会長で、後に衆議院議長になられた福永健司さんです。福永さんが、「お前たち恥を知れ。埼玉の代表が2回も抽選で勝ってきてるんだよ」って言って怒鳴りつけているんですよ。ぼくは横で聞いていてすごいなと。

すごいことはいっぱい見ているのですが…。埼玉県の予選のまだ代表決定戦ではない、1、2回戦だったんですけど、浦和南の試合を松本暁司さんの後ろで見ていたんです。そしたら急にゲーム中、「こっち来い」って選手を呼ぶんですよ。それで靴を脱いで、バシッと叩いて。そしたらその選手が「ありがとうございました。頑張ります」と言って出ていった。そしたらその後、後ろからお母さんが出てきて「ありがとうございました」って。これもビックリしました。

牛木：まあそろそろ時間なので打ち切りたいと思いますが、どうしてもというご質問、ご意見はありませんか。

牛木：では、ちょっと紹介しておきたいのですが、先ほど『高校サッカー年鑑』の話が出ましたが、高校サッカーの記録が、毎年この年鑑に掲載されて残っていることは、非常に貴重です。むかしは、サッカー協会も高体連も、あまり記録を大事にしていなかった。『高校サッカー60年史』を作るときに、ぼくがお手伝いをしたのですが、そのとき3年前の記録がもうなかったということがあります。高校選手権を大阪毎日新聞がやっているところに、岩谷俊夫さんが『高校サッカー40年史』を作られました。関係者にだけ配布されたものです。それで、60年史を作るということになって、40年からあとの20年間の記録はぼくが集めたんです。そのときに、協会にも高体連にも記録が保存されていないということがありました。今は、このサッカー年鑑のおかげで記録は残っています。この年鑑は講談社で、白髭という方がずっとやってくれています。

坂田：これを売るために、全国の加盟校の住所と電話番号を掲載して買ってもらおうとしました。今は各校何冊買ってもらっているのですか。

中塚：各校3冊ずつです。

坂田：これは松浦さんとね。

牛木：それは当時、サッカー部のある高校が3000校くらいあったんですね。3000校に1冊買ってもらえば3000部売れるわけですから、とんとんにはできるはずですよ。それが1冊でなく何冊も買えば十分に成り立ちます。そこで、今度は『60年史』にさらに追加していかなければならないわけですが、記録は年鑑にありますから、そんなに苦労しないですむと思います。さきほどの話の60年史を作るときに、最初に、お話しした東京蹴球団の大会なども入れてやるべきだと思ったんです。岩谷さんの作ったのは大毎の大会の40年史ですから、他の地域の大会はないわけです。ぜひこの機会に高体連の人たちをお願いしたいのは、記録はずっと集まっているからいいのですが、高校サッカーの歴史を今度は読み物のような形ででも編纂して欲しいと思います。その中に、例えば、今日の坂田さんの話は全部再編集して載せる価値が十分あると思います。でもそれではまだ足りないから、もう1、2回やってさらに話を聞いてもいい。それくらいの価値はあると思います。歴史を大事にすることは必要なことで、昔のサッカー協会みたいに3年経ったら捨てるようなことしないでちゃんと記録していただきたいとお願いして、今日の会を終えたいと思います。

おわりに（中塚）

最後に、高体連の人たちに大きな宿題を課せられたような気がしないでもないんですけど...

本当にありがとうございました。私の方から1つ補足、というのはおこがましいのですが、先ほどの坂田さんの話の中で、電通の鍋島さんが成田先生に相談されたという経緯が出てきました。つい先週ですけど、別のところで成田先生にお会いしたときにもその話が出てきました。鍋島さんから成田先生のところに相談があったときに、成田先生は3つの条件を出された。1つ目は、必ず国立競技場を使うこと。ナショナルスタジアムを使うことで、野球の甲子園のようなメッカにすると。2つ目はテレビ放送で、今日の話にあったことです。そして3つ目が、先ほど鈴木さんから質問があったことで、海外遠征、それもヨーロッパへ連れて行くということ。その3つの条件を出されたということです。いろんなところに、歴史の表舞台に出てこない話がいっぱいあるんだなと思います。

サロン2002では今年度、歴史を振り返るシリーズ、王道を行く歴史の研究者がやらないようなところを突っ込むシリーズをやっているんですけど、これは引き続き来年度以降もやっていかなければいけないなど、そんな気がしています。

どうもありがとうございました。

補足資料1 「高校サッカーと民放テレビ」配付資料(牛木素吉郎)

「高校サッカーと民放テレビ ～首都圏開催問題を中心に～」

ゲスト：坂田 信久(国士館大学教授、元日本テレビスポーツ局)

進行：牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会、元読売新聞運動部)

(中塚さんのあいさつと参加者の自己紹介)	15分(7時00分～7時15分)
1. 高校サッカーの歴史的背景(牛木)	15分(7時15分～7時30分)
事実関係についてのフロアからの質問・修正発言	5分(7時30分～7時35分)
2. 高校選手権と民放テレビ(坂田)	50分(7時35分～8時25分)
事実関係についてのフロアからの質問・修正発言	5分(8時25分～8時30分)
3. フロアからの意見	20分(8時30分～8時50分)
4. まとめ(牛木)、あいさつ(中塚)	10分(8時50分～9時00分)

高校選手権の歴史的背景 (牛木)

[要約](民放テレビ参入前の状況)

戦前の中等学校大会・・・はじまりは各地の高等教育機関と新聞社の提携。

戦後の高校選手権・・・関西での冬季(1月)開催が定着していた。

高校総体への加入・・・協会は冬の選手権単独開催で窮地に陥った。

1. 戦前の中等学校大会(年は開催年、年度ではない)

はじまり(協会設立以前。高等師範などの普及への熱意とマスコミが組む)

1915年(大正4年)全国中等学校野球大会(現在の夏の甲子園)はじまる。

京都大学野球部OB 大阪朝日新聞

1917年(大正6年)極東選手権大会のサッカーに日本(東京高師)が初参加

(関西)10月 近畿蹴球大会(奈良師範) 4校参加

1918年(大正7年)各地でサッカーの大会はじまる。

(東京)関東蹴球大会(東京蹴球団=高師系=、東京朝日新聞)6校

(東海)2月、東海蹴球大会(八高など、新愛知)4校、全国ア式蹴球大会

(関西)1月、日本フットボール大会(大阪毎日新聞主催)ア式8校、ラ式3校

中等学校大会の統合

1934年(昭和9年)日本協会が毎日の大会を中等学校の全国選手権と認める。

関西の大会(大毎の大会)

名称：1918年(大正7年)～1925年(大正14年)日本フット(フット)ボール大会

1926年(大正15年)～1947年(昭和22年)全国中等学校蹴球大会

主催：1919年(大正8年)～1933年(昭和8年)大阪毎日新聞社

1934年(昭和9年)～ 大日本蹴球協会

会場：1919年(大正8年)～1922年(大正11年)豊中

1923年(大正12年)～1924年(大正12年)宝塚

1925年(大正14年)～1928年(昭和3年)甲子園球場

1929年(昭和4年)～1940年(昭和15年)南甲子園

時期：1918年(大正7年)～1934年(昭和9年)1月または2月

1935年(昭和10年)～1940年(昭和15年)8月

参加：1918年（大正7年）～近畿のみ（大阪、和歌山、奈良、滋賀、京都、兵庫）
1926年（大正15年）～東京、愛知、福井、広島、朝鮮が参加（地区予選実施）
1930年（昭和5年）～北海道、熊本が参加
1932年（昭和7年）～宮城、埼玉、長崎が参加
1933年（昭和8年）～愛媛が参加
1934年（昭和9年）～全国大会として認められる（関東、東海大会を統合）
（1941年～1946年＝昭和16年～21年＝は戦争のため中断）

2. 戦後の高校選手権大会（年は開催年、年度ではない）

中等学校大会の復活

1946年（昭和21年）8月、関西のみの招待大会（第25回大会）

関学主催、毎日後援、会場は西宮球技場

1947年（昭和22年）12月、第26回大会（会場は西宮＝阪急電鉄が参画）

学制改革による再スタート

1949年（昭和24年）第27回「全国高等学校選手権大会」1月、西宮

会場の変更

1964年（昭和39年）大阪鞠（うつぼ）が主会場に

1965年（昭和40年）大阪長居が主会場に

1967年（昭和42年）西宮球技場に戻る（毎日、高体連が主催からおりる）

全国大会出場チーム数

1938年（昭和13年）～1954年（昭和29年） 16校

1955年（昭和30年）～1956年（昭和31年） 20校

1957年（昭和32年）～1958年（昭和33年） 25校

1959年（昭和34年）～1961年（昭和36年） 26校

1962年（昭和37年）～1966年（昭和41年） 32校

1967年（昭和42年）～1971年（昭和46年） 16校（毎日、高体連が主催からおりる）

3. 高校総体創設にともなう問題

全国高校体育連盟（高体連）の創設

・高校教育のなかでの体育の推進

・高校の校長による組織（競技別に部会）＝高野連と組織の性質が違う

高校総合体育大会（総体）の創設 1963年（昭和38年）＝NHK（広堅太郎さん）案？

・各競技の高校選手権はをまとめて夏休み中に開催する（オリンピック形式）

・一つの都道府県内を会場とする（国体方式）

・総合開会式を行う（オリンピック、国体方式）

・NHKが主催者に加わる（放映する、賛助金＝放映権料を出す）

サッカーとラグビーの対応

・高体連は冬季開催のサッカーとラグビーを夏休みに移すように要請

・ラグビーは夏季移行を拒否、冬季開催に引き続き毎日新聞社の協力を要請。

・高体連サッカー部会が夏休みへの移行に賛成。

・サッカー協会は、冬季の大会を継続するとともに夏季にも加わることを提案。

サッカー協会と毎日新聞社の対応

・夏季、冬季の開催は、当時の文部省の通達に反するため高体連は拒否。

・サッカー協会は毎日新聞の意向を打診。毎日は夏に移すことに反対しない。

- ・サッカー協会は、夏の総体とは別に単独で冬季開催を続けることを決定。高体連と毎日新聞は主催からおりる。

4. 日本蹴球協会による単独主催（苦難の5年間。～1971年）

単独主催の取り決め

- ・1966年（昭和41年）から高校総体のサッカー競技に日本蹴球協会は加わる。
- ・1967年（昭和42年）1月（昭和41年度）の大会（第45回）から、日本蹴球協会は単独で別個の全国大会として開催する。
- ・高体連は組織としては協力できない。毎日新聞社は冬にも夏にも加わらない。
- ・夏季の大会も、冬季の大会も、毎日新聞の創始した大会の回数は引き継がない。冬季の大会は「昭和**年度」と称する（昭和55年度、第59回から回数制復活）
- ・冬の大会を「選手権」とする（当初、高体連側は反対したが妥協）

高校選手権単独開催

- ・高校総体と国体の上位校は推薦で出場させる。
- ・全国大会出場校を16に減らし、各地域協会から出場校を推薦させる。
- ・会場を西宮に戻す（阪急電鉄の協力を求める）

補足2．追加資料（牛木素吉郎）

「サロン2002」の月例会で、坂田信久さんとともにサッカー高校選手権の歴史について話した内容の記録に、少し私見を補足しておきたい。

民放の立場と協会の立場

テレビは協会の苦境を知らなかった

日本テレビが、冬の高校選手権の放映を申し出たとき、日本蹴球協会は苦しい立場にあった。夏の高校総体にサッカーを加えたために高体連は協力できなくなり、大阪毎日新聞は手を引いた。テレビ放映はNHKが決勝戦だけ。協会は経済的にも、PRの面でも苦境に立っていた。

そこへ日本テレビから全面的な協力の申し出があったのだから「渡りに舟」のはずである。だから、サッカー出身の坂田さんたちが放映権獲得を推進したのは、サッカーを愛する者として、協会の苦境を救おうという気持ちもあってのことだと思っていた。

ところが、坂田さんの話を聞くと、そうではなかった。日本テレビ側は、協会の苦しい台所事情をよく知っていたわけではなく、苦境につけこむつもりも、助けるつもりもなかったようだ。

高校サッカーの放映権を取ろうというのは、日本テレビ内で、会社として出てきた計画であり、協会に対してけんめいに交渉した。一方、協会の小野卓爾常務理事は「ノドから手が出る」ほどのありがたい申し出であるにもかかわらず、巧みに駆け引きをしたようだ。

よみうりランド研修大会の意味

小野常務理事が「全面的に協力する証（あかし）を示せ」と要求したのに対して、日本テレビは、よみうりランドのサッカー場で「第1回全国高校サッカー研修大会」を開催してみせた。招待大会として、経費も運営も全面的に日本テレビが引き受け、有力校の参加を働きかけた。これが成功したのは、坂田さんの努力と誠意による人脈のおかげだと思う。

研修大会の開催は、日本テレビが本気であることを協会に対して示す結果になった。電通と TBS 系局も高校選手権の放映を申し出ていたので、「日本テレビのほうを選ぼう」と、小野さんが協会内を説得する根拠になったはずである。

しかし、当時の状況を取材していた立場からみると、この大会は、協会と高体連に対する「脅し」の効果があったように思う。

小野さんは、協会以外の団体が大会を開催することを非常に警戒していた。F I F A の規則にもとづく協会の統制権が侵されるからである。日本テレビが、事実上、独力で大会を開催してみせたので「これを続けられては困る」と考えたはずである。大会を「第 1 回」と銘打っていたのも「脅し」になった。

文部次官通達で「高校の全国大会は年に 1 度」と制限されていたのに、年に 3 つ目の大会が登場した。文部省の方針に従わなければならない高体連も窮したはずである。

テレビのネット強化のために

テレビの歴史からみると、民放の高校サッカーへの協力には、ネット系列強化のために使われたという背景がある。

東京には 5 つの民放キー局があり、地方の各県の民放テレビ局は、主として東京のキー局の番組を受けて放映していた。

当初は、一つの県に 1~2 の民放局しかなかったから、県域局は複数のキー局から番組を選んで受けて放送していた。つまり、地方の局は、一つのキー局のネットに完全には組み込まれてはいなかった。

しかし、各県の民放テレビ局の数が増えてくると、東京のキー局は全部の県の局を組み込んで全国ネットを作ろうとしはじめる。ちょうど、そういう時期に高校サッカーがネット強化の手段として使われたわけである。

TBS は電通と組んで、地方局から高校サッカー放映をはじめようとしていた。日本テレビは全国大会を先に抑えた。そのために、県によっては日本テレビ系列でない地方局が高校サッカーについては日本テレビの番組をうけるという「ねじれ現象」も起きた。

このように考えると、民放テレビの高校サッカーへの参入は、いろいろな意味で、いいタイミングが重なって実現したように思う。

民放テレビのおかげで、高校サッカーは見違えるように盛んになった。テレビのために、運営がゆがめられたという批判もあるが、運営の面でも改善されたことのほうが、ずっと多いように思う。

(以上)